

## 松前家による系図作成の一齣

工 藤 大 輔

はじめに

寛永十八年（一六四一）二月七日、太田備中守資宗を奉行として諸家の系譜を集めるといふ將軍家光の上意があり、これによつて「寛永諸家系図伝」（以下、「寛永譜」とする）の編纂事業が開始された。<sup>1</sup>

松前家でも、この年に登用された斉藤直政によつて系図がまとめられ提出されており、とくに、直政は「松前家の祖たる武田信広を新羅三郎系の若狭源氏の末に仕立あげたのは、直政ではなからうか」ともいわれている。小稿では、いかにして松前家が若狭武田氏の末裔となつたのかという点に注目しながら、この系図の性格について若干の検討を加えてみたい。

### 一 松前家が提出した系図の性格

松前家が幕府に系図の提出を求められたのは、

同二十年七月十六日、大將軍家光公為太田備中守資宗承、被仰出松前氏広家の素図於可書上之由、家臣斉藤多宮直政就之、則日直政謁

素圖書之筆者十二人之内、高野山見樹院法印立詮、申松前之先祖者若州屋形之息男牢人之来由、代々の名譽、依事繁多、取其要為一小卷、令法印清書二卷、其一卷者使資宗上 大將軍、一卷者氏広所持と、寛永二十年（一六四三）七月一六日のことであつたと『新羅之記録』<sup>2</sup>は伝える。將軍家光による系図提出の上意が太田資宗に伝えられたのは、寛永十八年の二月のことであるから、二年以上の時間を経た後のことになる。このときに松前家から提出された系図は、「寛永廿年幕府江御差出写」といふ「松前家譜」（以下、「系図①」とする）によつて知ることができる。<sup>3</sup>この系図には、「寛永二十癸未歲七月吉日 松前辦之助／太田備中守殿」とあり、系図提出の時期についての『新羅之記録』の記述を裏付けることができる。

また、内閣文庫蔵「松前系図 全」にも、右の『新羅之記録』の記事とほぼ同文の記述があるが、これには上使永井弥右衛門（直元）が遣わされたとある。<sup>4</sup>永井弥右衛門は、七月一四日の時点で「韓使聘礼」のことにより書院番をつとめており、妻は「松前隼人正忠広が女」であるといふ。忠広は、初代藩主慶広の二男である。ちなみに、このときに作成された系図を目にした松前景広が、『新羅之記録』をまとめるきっかけ

の一つとして、

殊更隼人正忠広、奉事大將軍秀忠公、於大坂陳令高名、加以秀忠公御上洛之時乍為病身供奉而於途中逝去、豈是不尽忠節矣、直政之失念故乎不載此卷中事、為実以遺憾、景広書載別之一卷、

と、この忠広の忠節が載せられていなかったことをあげている。

諸家より提出された系図は、「寛永譜」の編纂担当者の手によってまとめあげられてゆくことになるが、この過程で生じた疑問点などは奉行である太田資宗の名をもって諸家に問い合わせがなされたという。たとえば、津輕氏のばあい、

太田備中守資宗問、尚通信相続之事、時寛永十八年五月、津輕使者来、示近衛信尋公書狀一通、其狀曰、津輕系図龍山自筆也、然則政信後法成寺猶子無疑者也、云々、

と、政信が近衛尚通の猶子であることに疑問を持たれ、問い合わせがなされている。津輕家では、津輕信吉が、寛永十八年三月の段階で、近衛家の進藤修理に書状を遣わして、自家の筋目を保証して欲しいと依頼しており、四月二六日付の近衛信尋の返書により、津輕系図は近衛前久の筆によるものであること、政信は近衛尚通の猶子であることが伝えられた。五月に津輕の使者が示した「近衛信尋公書狀一通」はこの返書であった。

松前家の上使として派遣された永井弥右衛門は、姻戚関係のある松前家に系図の提出を求めるためだけのものではあったのか、すでに提出された系図に対する疑問を問うためのものではあったのかは俄には分からない。しかし、もし後者であったとすれば、それは津輕家のばあいとおなじよ

うに、若狭武田家の末裔であるという松前家の出自に関するものであったと思われる。

さて、「寛永譜」を編纂するにあたっては、

(1) 譜伝の最初にあげられている通称・官途・位階などは、最初に大書される。

(2) 原則として改年のところでは改行にし、干支は付さない。

(3) 徳川氏以外には敬称を一切用いない。そして、家康は東照大権現（または大権現）、秀忠は台徳院殿、家光は將軍家と表記し、台頭に記す。

(4) 家紋は必ず系図の後に記す。

といった形式的統一があり、とくに、(3)の家光に対する表記で「將軍家」とするものは、諸家から提出されたと思われる系図にはまったくみられないという。

内閣文庫には真名本の「寛永諸家系図伝」(三〇冊 総数約四〇〇点)が収められており(以下、「関本」とする)、その特徴は、

(イ) 諸家よりの呈譜、ないし呈譜の原形をよく残していると思われるもの。

(ロ) 寛永譜の未定稿の段階にあると思われるもの。

(ハ) 寛永譜の編纂にさいしての考証筆記。

(ニ) 寛永譜編纂のための参考資料。

の四種類の合綴本で、「寛永譜」編纂のための土台となったものの一部であるという。そして、これに収められている松前家の系図(以下、「系図②」とする)は、「関本」の中で唯一、さきの(3)のルールで

ある「將軍家」の表記を用い、台頭にしたものである。しかも、「系図②」は、文章なども日光東照宮所蔵の「寛永譜」とほとんど変わらないところから、「寛永譜の最終稿本と推定される」という。

一方、「系図①」と「系図②」とを比較してみたとき、若干の語句の相違はあるが、人物の名前の表記、日付などは完全に一致している。しかも、「寛永譜」の統一形式である(一)～(四)のルールも、(4)の家紋以外はすべて当てはまっている。<sup>17</sup>松前家の系図は、幕府に提出されたその時点ですでに「寛永譜」の形式に則っていたというができ、さらには、その語句などにしても、「寛永譜」と極めて近似したものとなっているということができる。

## 二 系図作成の背景

さきに紹介した『新羅之記録』の記述によると、松前家の系図は、家臣の斉藤直政がその担当者となり、幕府の系図編纂事業に関わっていた高野山見樹院の法印立詮が清書をおこなったと伝える。斉藤直政は、大坂籠城の浪人にその出自が求められ、藩主公広によつて寛永一八年に登用され、家老職に就いた人物であるという。<sup>18</sup>また、立詮については、寛永二十年九月の太田資宗による「寛永諸家系図伝序」に、

十九年三月十日重有

台命使僧録金地院元良、長老尾州法眼正意、水戸書生卜幽・了的、同預其事、高野山見樹院立詮及 當中筆史大橋重政・小島重俊預和字事、且招京都五岳僧侶十七人經日到着江戸、於是配分諸家系譜、

使道春・春齋掌清和源氏部、立詮属之、

<sup>19</sup>と、寛永十九年三月の編纂員の増員から幕府の系図編纂に携わるようになった人物であると記されている。そして、林道春・春齋のもとで「清和源氏部」を担当し、「高野山見樹院立詮・大橋長左衛門重政・小島久左衛門重俊三人令漢字改和字」と、真字本を仮名本に改める作業をおこなっていたということができる。

「松前系図 全」(以下、「系図③」とする)は、「系図①」と同種の系図であると思われる。しかし、とくに『新羅之記録』によつて加筆がなされているであろうと思われる部分が数か所あり、その意味では、「系図③」はその利用にさいしては注意しなくてはならない。そして、その「系図③」の末尾に次のような一節がある。

右 公儀差上系図留書也、

寛永諸家系図之伝載之、

此一巻、自修理大夫国信以上者、以官本系図考之、自若狹守信広以下者、松前之家譜記之、且遇松前之家臣斉藤多宮直政、其真偽以而備後來之一覧而已、

高野山見樹院住持

權大僧都法印立詮記之

これによると、幕府に提出された松前家の系図は、松前家が若狹武田家の末裔であると主張する部分を「官本系図」で、『新羅之記録』で「当家之元祖」とされる武田信広以下については「松前之家譜」によつて記したと伝えられる。

まず、松前家の系図については、『新羅之記録』によると、

慶長四年冬、於摂州大坂之御城西丸、十一月七日被召家康公御座間、被御寛狄之嶋之絵図、北高麗之様体有御物語、以其次而尋聞召当家之系図也、

というように、慶長四年（一五九九）に家康に系図について尋ねられている。また、慶長十四年（一六〇九）三月二八日の福山城の火災により、「当此時、從信広朝臣相伝鎧・良広朝臣之弓、殊更系図等令悉焼失」と系図が焼失したとも伝えられる。「松前之家譜」は、おそらくは、幕府に提出するために斉藤直政の手によってまとめられた系図であつたのではないだろうか。

つぎに、「官本系図」であるが、日光東照宮所蔵の真名本の松前家の系図から、相当部分を少々あげてみると、「信義—信光—信時—時綱—信政—信宗—信武—氏信—信在—（以下略）」となつてゐる。そして、ここで注目したいのは、「信時—時綱—信政」の部分である。『新羅之記録』で該当部分をみると、「信政—信時—時綱」と改められてゐる。この順序は、『尊卑分脉』をはじめ、「若狭守護武田氏系図」（仏国寺文書）・「両武田系図」・「若州武田系図」、そして、「寛永譜」の武田氏の系図でもおなじである。

しかし、松前家の系図と同じ順序でならんでゐるものが「閼本」に収められてゐる。「建仁寺十如院本」と朱書された「若狭武田系図」がそれである。つまり、松前家の系図の若狭武田家との關係を示す部分は、「寛永譜」編纂のために収集されてゐた系図であり、この事業に関わつてゐた立註によつて書かれたものであつたと思われる。「松前之家譜」には若狭武田氏に関してどのように記述がなされてゐたのか（もしくは、

まったくなかったか）は分からないが、「寛永譜」を編纂するために収集したものをそのままではめなくてはならない程度にあつたのだろうか。

#### むすびにかえて

寛永二十年七月に幕府に提出されたという松前家の系図は、「寛永譜」の体裁に則つて作成された系図であつた。それは、系図作成を担当した斉藤直政が、「寛永譜」編纂に関わつてゐた高野山見樹院立註と接触してゐたからにほかならず、「系図③」にいうように、立註が書き上げたのであらう。また、直政がこのときまでに、—後に松前景広に「情披見之、從当家之元祖信広朝臣迪盛広朝臣之代有年譜彼此相違之事、難偽多、於今不逮是非、」と評されるものであつても—「松前之家譜」というべき系図をまとめていたすれば、直政にとつて系図作成のハイライトは、松前家を若狭守武田氏の末裔とすることにあつたと思われる。「清和源氏部」を担当してゐた立註と接触したのは、そうした意識の現れであつたといえよう。しかし、一方では、慶長一四年の火災によつて焼失してしまつたからか、積極的に理由づけができなかつたともいえよう。それ故、「寛永譜」編纂のために収集した系図をそこにあてはめざるを得なかつたのである。

#### 註

（一）「大猷院殿御実紀」巻四六。

- (2) このとき提出されたのは系図ばかりでなく、「古書物」も書き写して提出していたようである(『鹿児島県史料 旧記雑録』後編六附録一、二〇五号文書、一九八六年)。
- (3) 海保嶺夫『幕藩制国家と北海道―松前藩政史研究序説―』(三二書房、一九七八年)。
- (4) 『新北海道史』第七卷資料一(一九六八年)。
- (5) 松前町史編集室蔵「中島家文書」。
- (6) この系図は、「系図①」とおなじように、「寛永二十癸未歳七月吉日 松前藩之助／太田備中守殿」とあるが、後に加筆された形跡がある。
- (7) 「大猷院殿御実紀」巻五四。
- (8) 「寛政重修諸家譜」巻第六二三。
- (9) 橋本政宣「寛永諸家系図伝と細川系図」(『日本歴史』五〇一号、一九九〇年)。
- (10) 内閣文庫蔵「寛永諸家系図伝」。
- (11) 津軽信吉書状写(『新編弘前市史』資料編二近世一、六二九号文書、一九九六年)。
- (12) 近衛信尋書状(同右、六三四号文書)。
- (13) 津軽家と近衛家との関係が認められるのは、文禄二年(一五九三)に為信が上洛し、「近衛家へモ参上」(同右、五五号文書)したというように、為信以降のことであるという(長谷川成一「津軽藩々政文書の基礎的研究(一)―近世前期藩政文書を中心に―」、『文経論叢』第一五巻第一号文学科篇I、一九八〇年)。
- (14) 橋本政宣「寛永諸家系図伝と諸家の呈譜」(『日光叢書 寛永諸家系図伝』第一巻、続群書類従完成会、一九八九年)。
- しかも、(3)の方針は、少なくとも寛永十八年の秋の段階では一定したものではなかったという。

- (15) 同右。
- (16) 同右。
- (17) 「系図①」は、冒頭部分に欠損部分がある。後掲する内閣文庫蔵「松前系図 全」(「系図③」)は、冒頭部分に「家紋刳菱」とあり、「系図①」はこれとおなじ位置に家紋の記述があった可能性がある。
- (18) 海保嶺夫『幕藩制国家と北海道』(三二書房、一九七八年)。
- (19) 『日光叢書 寛永諸家系図伝』第一巻(続群書類従完成会、一九八九年)。
- なお、西尾正信(書物奉行)の譜伝にも、おなじ内容の記事がみえる。
- (20) 「西尾系図」『日光叢書 寛永諸家系図伝』第六巻(続群書類従完成会、一九九一年)。
- (21) 『松前年々記』(『松前町史』史料編第一巻、一九七四年)では、「家康公於大坂御城西丸慶広被為召、当家之系図・蝦夷嶋之絵図上覧」と伝える。
- (22) 『日光叢書 寛永諸家系図伝』第一巻、続群書類従完成会、一九八九年。
- (23) 『国史大系』第六〇巻上(吉川弘文館、一九六六年)。
- (24) 『小浜市史』社寺文書編(一九七六年)。
- (25) 『続群書類従』第五輯下(続群書類従完成会、一九五九年訂正三版)。
- (26) 同右。
- (27) 『日光叢書 寛永諸家系図伝』第六巻(続群書類従完成会、一九九一年)。

(くどう・だいすけ 青森市史編さん室)